

経営と健康

第5回

財政再建・農村復興

「報徳 一宮尊徳」

講談師 一龍斎貞花



治水工事は正に戦い。敵は自然。桜川の堰造りには、川幅に応じた、屋根壁も茅という長屋を沈め、大小二つの水門を設け、平時は小さい方を、大水の際には大小両方を開いて洪水が起らないようにする。茅葺きの屋根で雨をしのいでいるのは、茅が水を通さないためで、コンクリートの代わり。費用少なく、数十年びくともしなかったという。道を造り、橋を架け、新しく用水路を通し田に水を注ぎ、水不足の農民は大喜び。

収穫高が上るやまたもや年貢アップ

をいたててきたが、

「約束の期限内。上げることは出来ません」と、領主に強硬に断る。

天保四年、青木村（茨城県大和村・現在桜川市）の仕法を開始。初夏のこと、なすを食べると、

「これはおかしい。秋なすの味がするぞ」

多くの記録を調べ、およそ50年おきに飢饉がくるに違いないと、

「今年は冷夏になるに違いない。冷害に弱い稲の苗を抜いて、寒さに強い稗や粟を植えるんじゃ」

果せるかな長雨と低温、大洪水など東北を中心に大飢饉。更に関東、関西に及び各地で餓死者が続出したが、桜町では一人の餓死者も出さず、苦しむ他の村へ支給したほど。

小田原藩分家桜町領の仕法が終わる、目標二千石を復興したのが天保八年金次郎51歳。15年の長きにわたった

復興の道のりでした。二宮町の桜町陣屋は、一千平方、役所の建物十棟以上という盛況も明治維新で陣屋は廃止された。

相馬藩の復興

福島相馬藩（中村藩）は天明の大飢饉の被害甚大。厳しい儉約で借金返済に努めるも、天保四く七年の再びの冷害でどうにもならなくなってしまう。江戸で学んでいた藩士富田高慶は、荒れ果てた領内の再建は、二宮先生の教えを受けることであると、金次郎に弟子入りし、厳しい仕法を学び一番弟子に。高慶から報徳仕法の素晴らしさを聞いた家老草野正辰と池田胤直は、「二宮先生、我が相馬藩でも仕法を行ってください」

懇望と弟子高慶の頼みもあり、多忙な金次郎も建て直しを承諾。

金次郎指導のもと仕法を任された高慶は、根本を至誠とし、その上で勤勞・分度・推譲を行うことにし、仕法役所を建て村々に仕法掛りを置き、水不足解消のため用水路を作り、米作りを促進、人の力で岩を削つての水路作りは難工事でした。

藩主となった胤直は備蓄舎を造って凶作に備える。農家の二男、三男にも家を持たせて独立させ農家の増加を図り、荒地を開墾と、報徳仕法の推進。藩校育英館を充実させ人材育成に力を注ぎ、北陸地方から浄土真宗門徒を移民として受け入れ人口増加を図り、人のいなくなった農村の建て直し。

高慶に続いて、家老草野、池田、熊川胤隆、慈隆和尚その他武士も農民も弟子になり、一体になって建て直しに邁進したのでございました。

一番弟子高慶、子の尊行と共に金次郎を支えたのが妻の歌子と娘の文。二

人は家事のかたわら事務的な仕事。不在の父に代わって教えを乞いに訪れる人や、入門者の対応に当たりました。弟子の高慶と文の縁談が持ち上がったが、大切な助手の文がいなくなると困る。文もまた、

「私がいなくなつては父が困る」となかなか結婚できません。やつと4年後、二人が出会つて13年後二人は結婚、高慶38歳、文28歳。しかし文は翌年病のため死去。わずか一年の短い結婚生活。妻も娘も報徳仕法を支えたのです。

二宮金次郎の名は世間に知れ渡り、各地から再建の依頼が殺到。小田原藩、下館藩をはじめ全国6百カ所以上の財政再建、農村復興に尽力。

文が亡くなつて4年後、草野正辰が、金次郎の行つたことは周の太公望と同じであると幕府に推薦し、幕府の普請役格二十俵二人扶持に召し抱えられ、55歳のこの時尊徳と名乗ります。

日光の荒地開拓を命ぜられ、日光の隅隅に足を運び綿密な調査を行い、計画書を提出。お膝元の今市は、

「田畑が少ない、杉が多いから杉の葉でお線香を作りなされ」と奨励。かつてお線香が東南アジア諸国に輸出されました。

正式に日光の再興を命ぜられたのが嘉永六年二月、尊徳すでに67歳。二ヵ月後病に倒れたが、病を押して事業に取り組み始めたものの、高齢と病のため、

「余を葬るに分を越すことなかれ。墓を建つことなかれ。ただ土を盛り上げその傍らに松か杉を一本植えおけばよろし。必ずこの言葉違えることなかれ」

との言葉を残し、安政三年(一八五六)十月二十日、今市の官舎で七十歳の生涯を終えたのでございました。

今市に葬られ、お墓を守る二宮神社が建てられ、小田原にも報徳二宮神社。尊徳の思想は弟子たちに受け継がれ、やがて報徳社運動として全国に広がっていったのです。

日光の建て直しは、子の尊行、弟子の高慶が引き継ぎ建て直しました。

尊徳が亡くなつて55年後の明治四十三年、最初の銅像が造られ明治天皇に献上され、その後昭和三年、名古屋の博覧会に出品され、やがて全国の小学校に建てられていたのでございます。

尊徳の普段の食事は、かぼちゃ、かんぴょう、干だらの煮物、小松菜の味噌汁、梅干、麦飯と質素ながらバラ

スのいい健康食が大きな手と足の六尺豊かな体力を造りあげたのでしよう。そして強い精神力があつたればこそ長生きしたと申せましょう。

戊辰戦争最中の慶応四年、妻歌子、伴尊行の家族が相馬に引越し、いかに弟子の高慶を信頼していたかが判ります。時の藩主誠胤は、歌子のために石神村に家を立て、毎年三百俵の米を送っています。歌子が亡くなるや、

小高の蛭沢に住んでいた高慶は二宮家の隣に移り住み、二宮家を支えました。師尊徳に対する、弟子の感謝の気持ちがあつたればこそで、師の恩に報

る心です。石神学習センターの庭に「報徳」の教えの碑、東隣の富田家墓地に尊徳と高慶のお墓が建てられています。

率先節約を実行し、先頭に立つて再建に全力を尽くした尊徳。

政府、各省庁、大企業の不正発表。もの作り日本の良さも失墜。金をかけないはずだったオリンピックも、どんな予算は膨れ上がり、しかもその内容は公開せず秘密も。

こうした現状から、勤勉、誠実、報徳の大切さを見直そうという機運が盛り上がりつつあります。

福島県相馬市、南相馬市、大熊町、浪江町、飯館村。茨城県筑西市、桜川市、栃木県日光市、真岡市、那須烏山市、茂木町、神奈川県小田原市、秦野市、静岡県掛川市、御殿場市、三重県大台町の全国17市町村が(市町村合併により減少、平成16年には29市町村)、毎年持ち回りで報徳サミットを行い、「尊徳の教えや仕法をこれからのまちづくり、人づくりにどう活かすか」をテーマに、意見交換が行われています。私も以前2カ所サミット基調講演で伺いました。大きな被害を受けた大熊町、浪江町、飯館村も、きつと尊徳の報徳精神で立ち直ることでしょう。

昨年11月9日、第25回全国報徳サミットが筑西市にて「心豊かでたくましく生きるひとづくり、まちづくり」のテーマで開催された。

尊徳の勤労、分度、人を推薦して役職をゆずる推譲の教えが、豊田佐吉、松下幸之助、御木本幸吉、土光敏夫らの精神的支えとなったのです。

70年間休むことなく働き続け、全国6百カ所以上の財政再建、農村復興に尽力した報徳の人、二宮尊徳の一席。